

千葉市立美浜打瀬小学校

正会員	小	嶋	一	浩	君
正会員	赤	松	佳	珠子	君
正会員	今	川	憲	英	君
正会員	上	野	佳	奈子	君
正会員	光	本	直	人	君

千葉市立美浜打瀬小学校は、1997年に日本建築学会賞（作品）を受賞している千葉市立打瀬小学校の設計チーム（メンバーの変遷はある）が、10年の時間をかけて同じ幕張新都心地区に計画した小学校である。打瀬小学校は当時の小学校の教育システムとしては先鋭的なオープンスクールに対応する空間として計画されていた。オープンスクールとは、個々の生徒の興味・適性・能力に応じた教育を実現するために、教室の壁と時間割の壁を取り払い、個々の子供が自分の学習プログラムに従って学習するというのが基本理念である。この教育システムを実現するために、日本建築学会賞（作品）を受賞した打瀬小学校では開放的な教室を複数束ねて広場を持つ構成で小学校を集落のような空間形式が提案されていた。そこでは管理する側からの空間ではなくこの小学校で学ぶ児童の側から計画することが主張されており、それを示すために全校児童のアクティビティをトレースするアニメーションによるプレゼンテーションが用いられていたのが印象的であった。

この美浜打瀬小学校は、その後このチームがいくつかの優れた学校建築をものにしてきた経緯をもって、小学校建築のあるべき到達点に至っているように思えるのである。いくつかの要点でその到達点は語られるのだが、この建築の持つ普遍性には、かつて建築計画学が数値や図面という硬質なデータによって標準という概念を規定していたありかたを、児童群のアクティビティに対応する空間群という、柔軟な関係性のモデルとして指し示すものに変換していることにある。昇降口のあり方、児童の経路のあり方、手洗いという行為に対する空間のあり方、掲示のあり方、生徒達の行動を誘導する家具のあり方、そして熱や空気、音のあり方など、このような回答のセットが空間モデルとして示されている。このモデルの束が、この社会が必要としている小学校という事象である。

美浜打瀬小学校は全国に多数ある小学校の一つでしかないのだが、この実在する小学校の空間は、この社会で施行されている小学校教育という制度に対して新たな規範を指し示しているように思える。我が国の教育空間はこれまで管理型の空間を規範としていた。それは少ない教員によって多数の児童をコントロールできる空間である。その空間のあり方のために、教育の時間は児童を抑圧する場となっていたという指摘がある。教室とは一人の教員が密室で多数の児童をコントロールするための装置であり、その教室が児童の人数に対応する数だけ並置されるというものであり、これまでの小学校の空間は管理型の空間装置であったとも言われている。それをオープンスクールという教育システムを実体化するという設計行為によって、小学校という空間を、教育される側にとって当たり前の社会集団を形成する空間に読み替え、そしてそれはさらにこの国の未来を設計するような回答を提示しているようにも思えたのである。審査員はこの理念に気づき、大いなる感銘を受けた。

この美浜打瀬小学校は教育施設として高く評価される必要がある。そしてそれが我が国の教育制度まで変更を与えることを期待する。

よって、ここに作品選奨を贈るものである。